

「授業備品」N016 H. 28. 5. 16 「自力解決終了時には全員が何らかの考えをもつ」(6県に配布中) *新たに沖縄県

自力解決終了時には全員の子供が何らかの考えをもつことは、当たり前のことだ。全員出来ているはずだが、そうではない実態がある。自力解決前後に、「見通し」をもたせることが重要であることは、学習指導要領の総則に記述されている。これまで「見通し」を持たせることは、「集団」を対象にすることが多かった。実はここに曖昧さがあった。「個」の見通しを確認していないのだ。その解決は、学習指導要領の改訂の趣旨の一つである「協働的」が担うと思われる。「個」が見通しをもつことが出来ているかどうかを確認し、もてていない子がいたら瞬時に「手立て」を打つ必要がある。

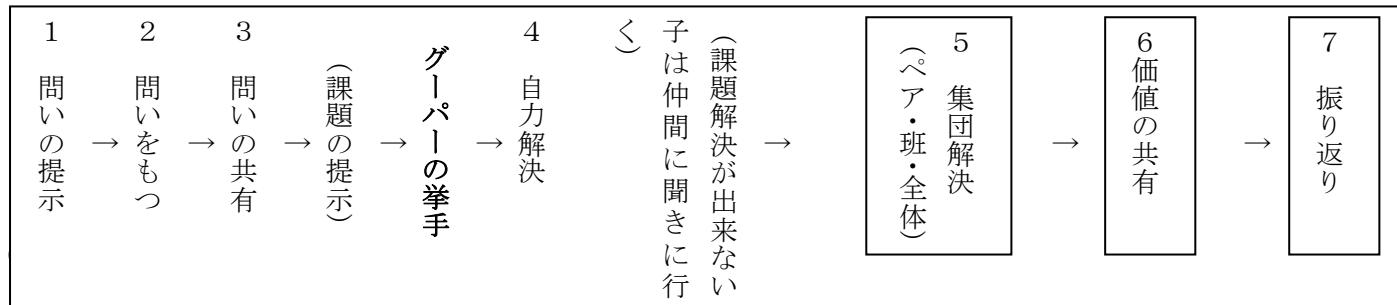
○「これから、自力解決です。時間は、○分です。」この後、教師はどのような手立てをしたのだろう。?

- ・自力解決のできない子供は、そのままにされ、おいていかれた。「固まる」しかない・・・。
- ・分からぬことを子供の責任にされていた。「覚えが悪い、暗記力がない」・・・・。
- ・分からぬ子は、「分からぬ」と言える環境がなかった。分かる子が中心に授業を進行していた。
- ・ヒントカードや教師の個別指導は行っていた。常に出来るわけではない・・・。
- ・自力解決の時間を設定するだけ・・・。分かっているかどうかの途中確認がないまま終了。
- ・自力解決や班学習の後、挙手を求めて、分かる子の数人しか挙手しない。いつものメンバー・・・。

○自力解決終了時には全員が挙手できる！

「授業備品」N011 H. 27. 12. 11 「授業常識の疑問」を再度、思い出そう。班学習・ペア学習は何のために行うのだろう。子供の挙手の内容が豊かになるのだけをねらっているのではない。分からぬ子が分る子から情報をもらい解決し、次の集団解決時に挙手をするための時間なのだ。

だが、算数や数学で得点がとれきれていない実態を分析すると、そうではなさそうだ。はっきりした「手立て」がないのだ。高知県安田小学校では、全教室で自力解決前後に、「ぐーぱー」の挙手をさせ、ぐー（分からぬ子）の子に手立てを即、行っている。全教師、全教科で行っているため子供たちは大事にされていると感じた。



○教師の行う手立て

- 1 全員に丁寧に説明をする。課題を把握しきれていない場合があるので、再度説明を行う
- 2 課題を解決できない子を集め、初期から指導を行う。分からぬ子は、普段から把握していると思うので。
- 3 分からぬ子は、早期に自力解決を止め、分かる子に聞きに行く。他の子は自力解決を続ける。
- 4 分からぬ子が多いと判断したら、すぐグループ学習を行い、「聞きあう」ようにする。
- 5 分からぬ子は、「分からぬ」と声を出す。仲間でその子を包む。
- 6 班学習の時は、「分からぬ子」から口火を切る。分かる子だけで進めない。
- 7 分からぬ子は、仲間からノートを写す作業だけでも行う。
- 8 「何もしない子」は、一人もいないように指導の徹底を図る。

・「グーぱーで理解」の挙手 ・教える ・聞く ・写す ・ノート展覧会 ・グループ直行型

高知県教育委員会発の「授業づくり Basic ガイドブック」を具体化したビデオが完成した。ビデオを提供して下さった方に改めて感謝をしたい。ガイドブックとビデオを重ねると授業の進め方が分かると思う。子供たちと一緒に見ていただきたい。授業の主体者は教員ではなく、子供だからだ。学習指導要領の改訂を意識する前に、自らが変わるかどうかを意識することが重要だ。意識すれば、「結果」がついてくる。

